

薛蟠論 — 愚兄賢妹という視座より —*

池間里代子**

はじめに

中国清代中葉の小説『紅樓夢』の登場人物数は諸説ある⁽¹⁾が、その中で薛家の馬鹿息子として道化役を担っている薛蟠について論考を試みる。

薛蟠は作品の中で折にふれ登場するが、主題とからむ事は比較的少なく、いわゆる傍系人物である。しかし、主要登場人物である妹の薛宝釵と対照してみると「愚兄賢妹」という視座が現われる。作品世界はリリカルな悲劇的愛情を主題に、徐々に滅亡へ向かっていく貴族家庭を描いたものであるが、作品に薛蟠が登場することの意味について従来はほとんど問題視されていなかった。本稿では、悲劇的な物語に登場するこの人物の言動をまとめ、『紅樓夢』と彼の持つ喜劇性について考察していく。

使用テキスト：『紅樓夢』上・下 人民文学出版社（1982年）

使用訳本：伊藤漱平訳『紅樓夢』上・中・下 平凡社（1973：昭和48年）

なお、引用論文の和訳は池間による。

1. 薛蟠の行動

薛家は紫薇（中書）舎人薛公の子孫で、父親の早世により薛蟠が当主である。現在では戸部（大蔵省）御用達をつとめる豪商である。妹の薛宝釵を宮中に入れようと上京し、親戚の買家に滞在している。

薛蟠は『紅樓夢』全編にわたって登場するが、彼の特異性は2件の殺人事件に関係していることである。第1件は手下が撲殺したもので、薛蟠は監督責任の罪に当たる。第2件は酔った上でのいさかきが原因で相手が死亡した、いわば過失致死である。ただし、2件ともに薛蟠自身には殺意がない。それでは、彼の行動を時系列順に確認する。

第4回 賈雨村が役人になって初めて裁判をすることになった殺人事件。賈雨村が浪人時代に懇意だった甄士隱の娘英蓮が誘拐され、育った後に女中として売られた。人さらいが

* Xue Pan's Theory —From the perspective of goofy brogher and wise sister—

** Riyoko Ikema 十文字学園女子大学 21世紀教育創生部（Division for Arts and Sciences）

キーワード：愚兄goofy brother 賢妹wise sister 現実逃避escapism 道化役comedian 喜劇性comic

馮淵と薛蟠に二重売りしたため喧嘩になり、薛蟠が家人に殴りこませ英蓮を入手しそのまま上京。馮淵は3日後に死亡。

- 第4回 薛蟠の幼少時代のエピソード。幼い時分に父を亡くし、母が溺愛したため醸成された性格。「箸にも棒にもかからぬ碌でなし」「5つ6つになった時分から、もうぜいたくはいうわ威張りちらすわで大変なもの」「商売から世事にいたるまでまるきり無知」
- 第9回 家塾での薛蟠の様子。「銀子だの酒食の供^{かね}だのにあずかる代わり薛蟠が馬鹿大将然とのさばり返るのを見て見ないふり」「根が浮き草同然のお天気屋で、今日は東、明日は西とお気に入り^ががしよっちゅう変わる」
- 第16回 香菱（英蓮）が薛蟠の妾になったことが、賈蓮の噂話によって明らかになる。
- 第26回 5月3日、薛蟠の誕生祝に賈宝玉らを誘い、大蓮根・大西瓜・チョウザメ・シヤム燻製豚を示して「自分ひとりで食べたのではどうももったいないような気がするし、…わざわざお招^よびすることにしたのですよ」と気のいいところを発揮した。しかし、春画の落款を「庚黄」だと言い張るも賈宝玉から「唐寅」の間違いだと言指され、無学ぶりを露呈した。
- 第28回 賈宝玉が処方した薬を妹のために調合するのだといって、王熙鳳に簪の真珠を無心したことを披露される。
- 第28回 馮紫英が招待した酒宴で酒令をすることになり、学問のない薛蟠が下品な詩を作って一同を笑わせる。「聞く気はあるの？ ないの？ …みなさん聞くのがうんざりで、それに酒のあとの句も免除ということにしてもらえるなら、歌うのは見合わせますけどさ」⁽²⁾
- 第28回 蔣玉菡（琪官）と賈宝玉が密談していると、嫉妬して割り込む。
- 第33回 賈宝玉が父からひどく打たれた原因の一つが薛蟠だと噂される。琪官は忠順親王に仕えていたが一時的に行方がわからなくなった。「どうも薛の若様が日頃から焼餅をやっておられ、うっぷんの晴らしようもないところから、よそでたれかをけしにかけて、そいつの口からお殿様のまえで焚きつけさせるような手を使われたもよう」
- 第34回 賈宝玉が打たれた原因が自分だと、母と妹から決めつけられた薛蟠の反撃。「逆上のあまりばたばた飛びはね、この首を賭けてもいい、誓って身に覚えのないことだと、弁解にこれつとめるのです」「いっそ園へ踏んごんで宝玉のやつを打ちころし、代わりにこっちも命を償ってやるとしたら、みなさぞせいせいすることだよよ」「妹が泣きだしたものですから、これは自分が軽率だったとさとり、そのままぶんぶんしながら自分の部屋へ引きとって不貞寝をするのです」
- 第35回 昨夜の反省。「お母さんももうご立腹なされることはありませんし、宝ちゃんだってやたらと気にすることは無い。」「いまではお父さんもこの世にいらっしやらぬというのに、お母さんに対しては孝行の真似ごともできず、宝ちゃんにもろくによくしてやれず、…まったく畜生にも劣るわたしだ」
- 第47回 柳湘蓮に対して「薛蟠がまたも持病を出してしまった」。柳湘蓮は人気のないところで薛蟠を殴り、薛蟠に「お願いします、旦那！この眼なしの盲めを勘弁してやってくださいまし。今日以降、わたくし、あなたさまを立てます、あなたさまには一目も二

- 目もおきまするゆえ」と命乞いをするはめになった。
- 第48回 薛家の支配人が商品の仕入れで旅をするのに便乗し、薛蟠も旅をすることになった。「なんとかひとつ一人前になる修行を積もう、商売のこつも身につけたいとそんな欲を起こした」
- 第66回 仕入れの旅で強盗に遭った薛一行に、柳湘蓮が助太刀をして意気投合、義兄弟の契りを結んだ。その2人に遭遇した賈蓮は尤三姐が柳湘蓮と添い遂げたいと伝え、悲劇（尤三姐の自害、柳湘桂の失踪）の序章となる。
- 第67回 薛蟠が無事帰宅、土産を披露する。江南の品物のなかに「虎邱の頂上にて泥で作らせた薛蟠の小さな像もあり、これが本人生き写し。妹は思わず吹き出す始末」
- 第67回 柳湘蓮が失踪した件について「あんたらは笑うかもしれないが、あの人をさがし当てられなかったわたしは、つい泣いてしまったほどだった」
- 第79回 夏金桂と薛蟠が婚約する。二人は親戚筋で大人になって再会。「お兄さまは即座にもうこのかただと見こまれました」しかし、二月もすると夏金桂がつけ上がり、「いよいよ凶に乗り、いっそう高姿勢に構えてとおし」「身から出た錆と一人こぼしているばかり」
- 第80回 夏金桂に付いてきた女中に色目を使いだす。夏金桂の策略によって大騒ぎが勃発する。「金桂がのさばればのさばるほど、薛蟠はいやがうえにも骨抜きにされてしまう勘定」家庭が落ち着かず、薛蟠は家から追い出される。
- 第84回 母親の心配「もしや外部でお酒でも飲んで、なにか事をひき起こしはせぬかと、そればかりが案じられます」
- 第85回 案の定、旅先から薛蟠の過失致死の一報がもたらされ、大混乱。
- 第86回 小物の事情説明「家のなかがあまりに揉めるので、つい自分としてもおもしろくなく、江南の方へ商品の仕入れに出かける気をおこしたのだ。…その給仕を呼んで酒を取り換えるよう言いつけたところ、そいつのきかたが遅かったので、…杯をその男の顔に投げつけてしまったのだが、ただの一打ちでやつは血を出して床にぶっ倒れ、…ものをいわなくなってしまった」
- 第99回 邸報に、薛蟠を取り調べた知事の不正が掲載されており、それを賈政が目にする。
- 第100回 薛蟠の裁判がうまくいかず、母親の運動も奏功しないうちに死罪の判決が出る。
- 第103回 夏金桂が香菱（英蓮）を毒殺しようと企むが、失敗して自分が毒を飲んで死んでしまう。
- 第120回 薛蟠に恩赦が出て釈放される。母親の提案で香菱が正妻になるが、難産のために子を産んで死に、甄士隱（彼女の実父）の引導により天上界に帰っていく。

2. 薛兄妹に対する評価

次に、薛蟠と薛宝釵兄妹に対する評価について、代表的な意見を挙げてみる。

2-1. 薛蟠についての論評

- ①马经义：「曹雪芹惯用“人物对照，相互为镜”的创作手法。…艾芜先生曾经说道：…贾宝玉和

贾琏，薛蟠等是对照的，贾宝玉爱女子则注意精神方面，能替一个女人梳头，既已满足；贾琏，薛蟠则不然，他们是溺于肉欲之乐的。⁽³⁾

(曹雪芹は「人物を対照し、相互を鏡とする」創作手法をよく用いた。…艾蕪氏はかつてこう言ったことがある。…賈宝玉と賈蓮・薛蟠などは対照的である。賈宝玉は女性の精神面を愛し、女性の髪を梳いてやるだけで満足する。しかし、賈蓮・薛蟠はそうではなく、彼らは肉欲に溺れているのだ。)

- ②顾鸣塘：「薛蟠是作者着力刻画的封建社会又一种败家子，单在回目，作者就给他下了三个评语“呆霸王”，“滥情人”，“贪夫”，活画出了一个骄横，自作多情又蠢笨可笑的形象。⁽⁴⁾」

(薛蟠は作者が気を配って描いた封建社会の負け犬であり、回目（タイトル）の中ですら、作者は「^{がいは}獣霸王（大馬鹿の暴君）：第47回」「^{むやみに}滥情の人（むやみに発情する男）：第48回」「^{よくぼり}貪夫：第80回」という評語を与え、一人の傲慢で多情であり馬鹿男キャラクターを活写した。)

- ③杜贵晨：「(建国前の論文)主要探讨其思想性格，前期结论较为简单单一，贬斥的意见较多，说他是“最劣最差”之徒；后来从正面评价的观点增多，说他“憨直”，可爱等等；近年来开始认识到他的复杂，说他是“兽性”和“人性”，“野性和阳刚之气”的统一。⁽⁵⁾」

(建国前：1949年以前の論文は、主としてその思想や性格を考察したので、結論は比較的単純であった。すなわちけなす意見が多く、彼は「最もダメで劣った」輩と^{やから}言われた。後に正面から評価した観点が増してきて、彼は「愚直だ」とか可愛いなどと言われた。最近では彼の複雑さが認識され出し、彼は「獣性」と「人性」、「野性と陽気さ」との合成であると言われている。)

2-2. 薛宝钗についての論評

- ①马经义：「艾芜先生曾经说道：林黛玉和薛宝钗是两个包含着不同思想意义的对立形象。林黛玉追求的是建立在思想一致基础上的纯真爱情；薛宝钗追求的是家世利益的最大化。⁽⁶⁾」

(艾蕪氏はかつてこう言ったことがある：林黛玉と薛宝钗は二つの異なった思想を持った対立するキャラクターである。林黛玉が求めているのは思想が一致しているという上での純粋な愛情であるが、薛宝钗が求めているのは家柄を最大化するということである。)

- ②周中明：「赞誉者称她“真是十全十美的佳人”，“封建社会完美无缺的少女的典型”，“是中国封建道德，文化的最高结晶，是中国封建社会培养，树立起来的最好标本”。贬斥者则认为：“虚伪残忍，世故圆滑，贪名慕势，心机深细，阳为道学，阴为富贵，善于阿谀奉承，一心想往上爬，这就是封建礼教的忠实信徒薛宝钗的真正嘴脸”。⁽⁷⁾」

(讀える者は、彼女は「完全無欠の佳人」「封建社会における完璧な典型的少女」「中国封建道徳や文化の最高傑作であり、中国封建社会が生み出し樹立した最良の手本」だと言った。けなす者は、「残忍さを隠し、世事に長けており、目上に取り入り、計算づくで、道学を持ち上げ、富貴を隠し、媚びへつらいに長け、一貫して上昇志向である。これがすなわち封建礼教の忠実な信徒である薛宝釵の実際の面構えである」とみなしている。)

- ③ 蔣和森 (小川陽一訳) : 「彼女は、どんな所でも「愚かなふりをし」「分と時に従い」立ち居振る舞いはすべてどれも「上品で落ち着いている」ように見えた。だから榮国府のような人間関係が複雑で、矛盾だらけの環境の中でも、彼女だけはただ一人、人びとから好かれた。…「とても心が広い」「よくできた人」と言ってほめた。…注意に値することは、彼女がときには自己保身のために自分を隠すようにして偽装することのほかに、自分のために人を犠牲にする道に進むことさえ惜しまなかったことである。…ここに表現された薛宝釵は、彼女の悪人の兄ととてもよく似ている。…「温婉賢淑」な大家の風格の背後に隠されているというだけのことである。⁽⁸⁾」

3. 愚兄賢妹の系譜

以上、『紅樓夢』での薛蟠の行動と、兄妹の評価について概観した。概ね馬鹿兄と賢い妹であると論じており、両者の関係が「愚兄賢妹」であると総括することができる。

薛蟠が「愚」であることは彼の行動を確認すれば一目瞭然である。彼は身分の高い財産のある家柄の長男として、母親の薛未亡人と妹の薛宝釵とを庇護すべき立場であるにもかかわらず、逆に彼女たちを常に心配させる困った兄なのである。彼は模範となり育成すべき父親の不在と、溺愛する母親によって幼いころより本能の赴くままに行動し、それが許容されてきた。第1の殺人事件において、母親の運動によって犯罪が「無いこと」になり、反省の機会を失う。賈府では酒の席で蔣玉函にちょっかいを掛けた結果、逆にひどく打たれることになる。正妻 夏金桂を娶るも、舵取りが全くできずに商品の仕入れと称する家出を決行する。その間に第2の殺人事件を起こし、今度ばかりは収監される。薛蟠の引き起こす事件はよく酒がからんでおり、元々「愚」である性格がアルコールによって振幅されるのか、理性が吹っ飛ぶ様子だ。その反面、妹には優しい一面を見せる。妹のために面倒な薬を調合してやったり、酔いがさめた後に反省の弁とともに新しい服を作ってやろうと言ったり、旅先から妹のためにたくさん土産を買ってきたり、という具合である。

一方薛宝釵はいわゆる良妻賢母型の少女である。彼女には自分の模範となる母親がいるが、場合によっては母親を「たしなめたりなぐさめたり」することが可能なほど物の分かった娘だ。封建社会においては大変評価される人格を持ち、少々計算高いと思われるほどに冷静な性格である。『紅樓夢』ではヒロインの一人である林黛玉と対照されているが、その林黛玉に対しても彼女の持病を案じて燕窩 (ツバメの巣のスープ、肺病に効果があるといわれている) を届けさせたりしている。薛宝釵の聡明さは様々な局面で発露されているだけでなく、女中からも慕われている。例えば、賈宝玉の女中頭であり非公認の妾である襲人が、宝玉の母である王夫人に

「宝玉を大観園に住まわせない方がいい（宝玉と林黛玉が相思相愛なので危険）」という打ち明け話をして薛宝釵を援護射撃するというエピソードがある。（第34回）なぜ女中である襲人が林黛玉を危険視したかということ、すでに自分は宝玉の妾同然であり公表されていないだけである。宝玉が近い将来正妻を迎えることを考えると、人に冷たい林黛玉よりも温厚な薛宝釵の方が自分にとって与しやすいであろうと結論付けたのである。結果的に王熙鳳の暗示から賈母（宝玉の祖母）の発案として、宝玉の正妻には薛宝釵が決まる。薛蟠や兄嫁の夏金桂に振り回されながらも、薛宝釵は賈宝玉の正妻として迎えられ舅姑に孝を尽くす「完璧な賢妹」なのである。付け加えれば、襲人ならずとも林黛玉と薛宝釵との駆け引きは『紅樓夢』の中にたびたび現われ、読者も林派と薛派に分かれて論戦してきた。しかし、実際には両者の間には初めから勝負がついていたのである。封建社会において正妻に最も期待されることは後継ぎの男児を産むことであり、林黛玉のような虚弱体質ではその期待に応えることは難しかった。薛宝釵こそが正妻としての条件を備えていたのであり、襲人の心配は無用だったのである。にもかかわらず敢えて襲人は林黛玉を貶めた。それは妾視線の薛宝釵観だったからである。

さて、この「愚兄賢妹」という言葉は筆者の造語ではない。実は、本邦において伝説的ロングラン（48作）となった映画「男はつらいよ」のテレビバージョン仮題だったのである⁽⁹⁾。当時は漢字4文字の「愚兄賢妹」では固い印象だということで退けられ、「男はつらいよ」に決まった。つまり、車寅次郎とさくら兄妹は「愚」「賢」の対照であると認識されていたのである。

『紅樓夢』における薛蟠と薛宝釵においても同様であるが、一般的に兄は両親の初めての子であり、愛情をかけて慎重に育てられた結果比較的優秀かつ円満な性格に成長すると考えられている。妹は兄に遊んでもらったり時には勉強を教えられるもらったりして、尊敬の念を育むことが多いのではないだろうか。ところが、兄の成育歴に何らかの欠損がある場合——車寅次郎の場合は、亡くなった優秀な兄とさくらは両親の子だが、寅次郎だけは芸者に生ませた子であった⁽¹⁰⁾し、薛蟠の場合は幼少で父と死別し、母親が溺愛した——兄の性格に問題が生ずることがままあったと推測できる。車寅次郎は学校生活という強制装置に合わず、家を出て香具師として全国を放浪している。薛蟠は自らが引き起こした、酒と女が遠因の事件を次々と引き起こし、家にいられなくなって「仕入れ」と称する旅に出る。一方、さくらは実家筋の団子屋を手伝いながら町工場勤務の夫ともに地道な生活を堅持し、薛宝釵は母親の相談役となって家で勃発する兄嫁や妾の騒ぎを収め、買家へ嫁いでも完璧な妻として振る舞っている。

ここには、漂泊する兄と定住する妹とが対照されている。そればかりか、自由人である兄という記号もみえる。もっとも車寅次郎は全くのノーテンキな男ではなく、自由であるために「つらいこと」を耐える人間である。反対に薛蟠の自由は殺人につながっていく可能性を含んでおり、そのために母と妹は心配するのである。

以上みてきた通り、「愚兄賢妹」の系譜は物語になりやすく、どちらかというとい喜劇性を帯びている。その理由は価値観の逆転にあると考えられる。普通は年長の男＝兄が優秀であるべきところを、年少の女＝妹がそれに代わっているのである。「愚兄賢妹」というキーワードで考えてみると、漫画界では「ドラえもん」のドラえもとドラミ兄妹もこれに該当するだろう。

妹の力については、すでに佐藤忠男と宮田登が柳田国男『妹の力』を挙げている⁽¹¹⁾。なお、柳田の『妹の力』は「いもうとの力」と読むのが正しいそうだ⁽¹²⁾。

4. 薛蟠の喜劇性

薛蟠の喜劇性は本能の赴くままに行動し、ことごとく失敗するところに起因している。特に「濫情」であることが、評価されていない点である。しかし、薛蟠の「濫情」はあっけらかんとしていて時に幼い。欲しい女を欲しがって何が悪い、式の「濫情」である。これは賈珍（息子の嫁に手をつける）や賈蓮（隠密に妾を囲う）の行動とは趣を異にしている。また、両者ともに失敗の結果として自殺者が出るところが共通している。しかし、薛蟠の正妻である夏金桂に関しては、妾の香菱（英蓮）を毒殺しようとして誤って自分が毒を飲んだものであり、いわば自業自得と言える。賈珍の場合は息子の嫁との密通が原因で彼女を死なせた⁽¹³⁾ のであり、賈璉はせっかく手に入れた妾の尤二姐を、正妻の王熙鳳によっていびり殺されたが、王熙鳳の底意地の悪さを甘く見た結果である。両者が引き起こした事件は似たような結論になっているが、その内容は全く異なっている。

次に、薛蟠は自分が窮地に追いやられると旅に出てしまうところが喜劇的である。彼の旅は2回繰り返される。第1回目は柳湘蓮に色目を使った結果、こっぴどく殴られた後「商売の見習いに」という名目で旅に出ることになる。ここで薛蟠は女性だけではなく、男性に対しても「好きだ」と思えばアタックしてしまう、とんでもない男であることが暴露されている。第1回目の旅では終盤に強盗に遭うものの、柳湘蓮の助けで無事帰還している。第2回目の旅は、正妻と妾の争いの余波で家から追い出された薛蟠が「仕入のために」旅をし、その間に居酒屋で殺人事件を犯してしまう。結局長く拘留され、実家の財産を救命運動資金としてほとんど使った後に恩赦で帰還する。薛蟠の殺人事件から先、正妻の夏金桂は益々荒れて遂に服毒死にまで至る。薛蟠にとって旅は「遁走」あるいは「現実逃避」であり、商売のコツを掴むだとか顔をつなげるなどという名目とはかけ離れている。

最後に、薛蟠の「かわいい」部分について触れる。彼は第26回で自分の誕生日の到来物を「ひとりで食べるのはもったいない」と言って仲良しを招待している。ここには彼の天真爛漫さが描かれている。続いて第28回の宴席場面で酒令をする芸妓に向かって「おい、おまえ、この薛の旦那が控えていなさるというのに、なに将来の心配などするのだい」と茶々を入れる。ここでも芸妓が唄う歌詞—もちろん現実世界とは異なっている—に反応して口を出す、天真爛漫さが披露されている。最も「かわいい」部分は、第1回目の旅から帰郷した彼の土産に、自分の似顔を描かせた泥人形を持って帰って来たことだろう。さすがの薛宝もおかしくて噴き出したほどだ。これらのエピソードは、薛蟠が乱暴で本能のままに行動する粗野な馬鹿君、というキャラクターを側面から「でも気の良いところもある」と支える働きをしている。

このように、薛蟠という人物形象は『紅樓夢』の中では一見浮いており、不必要な部分かと従来思われていた。しかし、彼の性格や行動はどんな人でも多かれ少なかれ持っているものであり、それをデフォルメした形で造型されたのが薛蟠ではないだろうか。デフォルメの方向性が陰湿になると賈珍・賈璉になり、喜劇的にすると薛蟠になるのではないだろうか。薛蟠はダメ男だが、ワルではない。本当のワルは息子の嫁を犯し死に至らしめた賈珍や、こっそり囲った妾を妻にいびり殺されてしまう賈璉らである。賈珍は道徳的に申し開きができず、賈蓮の場合は妻の性格を見くびったところに洞察力を欠いた。彼らは策を巡らせて悪事を働いたの

であり、薛蟠はそこまで頭が回らず、暴力的で強引な性格ではあるが蔣和森がいう「悪人」ではなく「愚人」なのである。

では、『紅樓夢』において薛蟠を登場させる意味は何だろうか。『紅樓夢』の主題は「はじめに」で述べたようにリリカルな悲劇的愛情を主題に、徐々に滅亡へ向かっていく貴族家庭を描いたものである。「悲劇的愛情」とは賈宝玉と林黛玉の実らぬ愛情を指す。二人は好きあうが故に喧嘩したり誤解したりするが、結局「禪心はや 泥にまみれし 絮なれば、鷓鴣のごと 舞うことなし 春風に向かいて（私の心は泥まみれになった柳の綿のようにフワフワとせず、春風に向い故郷を恋しがって舞う鷓鴣のように心が乱されません、あなただけを思っています。⁽¹⁴⁾）」（第91回）と賈宝玉の告白を聞いて「黛玉はさしうつむいて、なんともいいません」と暗に同意し、二人の心はこの瞬間結ばれた。しかし、林黛玉は第98回において賈宝玉と薛宝釵の挙式中に病死するのである。中国において悲劇は皆無ではないが、比較的少ない。『紅樓夢』は伏線という形で、一旦は没落に傾いた買家だが宝玉の遺腹の子が家を再建する、という救いがあるものの最終章は一家の離散である。物語前半で描かれた美しい少女たちの楽しい生活は色あせ、生別死別の悲しみが充満してくる。とりわけ林黛玉の死は読者から涙を絞ったシーンであった。

このような悲劇的作品の中に喜劇的要素を点綴することにより、物語に奥行とリアリティをもたらしたのではないか。すなわち、薛蟠の妹薛宝釵は賈宝玉を巡って林黛玉と三角関係ともいえる一端を担っている。賈宝玉と林黛玉は前世の因縁から「木石縁」といわれ、この二者は感情が通じており読者も結ばれることを期待している。一方、賈宝玉と薛宝釵は「金玉縁」といわれ、宝玉が生まれる際に口に含んでいた宝石に刻してあった文言と、宝釵がお坊さんから金の首飾り（文言付）を常に下げるよう言われたものが対句になっていることから、将来この二人が結婚するのではないかと思われていた。実際には賈宝玉の正妻には薛宝玉が選ばれるのであるが、その主たる理由は周囲から「よくできた娘」と評価され、その結果「是非当家の嫁に」とライバルである林黛玉を抑えた。ところが彼女の兄が「愚兄」であることが、読者に浮世の不条理を感じさせる根拠となっているのではないだろうか。薛宝釵自身も身寄りがないと嘆く林黛玉に「兄がいるといってもいないも同然」と返している。薛宝釵の円満なプロフィールに「愚兄」というマイナス要因が滲んでいるのだ。

また、薛蟠のような単純直情型の男は世上まま存在するものである。とりわけ封建社会において金と権力ある男は、薛蟠のような振る舞いをする者もいただろう。作品にダメ男を登場させ、ときにコミカルな言動をさせる意図は、おそらく「こういう男もいる」という既視感を持たせるためではないだろうか。

作者は小説の中で、男の道化役を薛蟠に任せ、女の道化役を劉ばあさん⁽¹⁵⁾に任せられたものと考えられる。

おわりに

今回薛蟠を取り上げ論じるために第1章において彼の行動を確認した。そこではあたかも『紅樓夢』アナザーストーリーとでもいふべきものが得られた。物語の本筋は賈宝玉と林黛玉

の淡い恋愛、それに薛宝釵や他の少女たちが織りなす繊細で美しい貴族の日常である。しかし一旦薛蟠を中心に物語を追うと、彼のとてつもないダメぶりと共に、封建社会における女性の地位の低さが如実にあぶり出されている。薛蟠は結局、人さらいから香菱（英蓮）を買って妾にし、正妻として夏金桂を迎えるも実家から介添として着いてきた女中も妾にした。実は、『紅樓夢』に登場する男性もほとんど正妻以外に妾を持っている。では、正妻であれば精神的に充足するかといえば、薛蟠に嫁いだ夏金桂ですら薛蟠が「初もの好き」なのが気に入らず大暴れしており、決して幸福なようではない。しかも、薛蟠は死罪判決を受けているとは言え、執行猶予されているので夏金桂は実家に帰る事も不可能である。せめて第1の殺人事件を揉み消さずにおけば、薛家の不幸は回避されたであろう。しかし、薛蟠には「かわいい」ところがあるにせよ、群を抜いたダメぶりでは救いようがなかつたであろうことも予測できる。

愚兄薛蟠は恩赦で出獄したあと、母親の勧めで香菱（英蓮）を正妻にして一子をもうけるが難産で香菱を失う。賢妹薛宝釵は科挙試験の直後失踪した夫の賈宝玉の遺腹の子を出産、その子が賈家再興を担う予定である。すなわち、薛兄妹は相前後して配偶者を亡くし、子のみが残る。『紅樓夢』の作者⁽¹⁶⁾はここで筆を止めている。

ところで『紅樓夢』の作者であるが、注16のように続作者説がある反面、同一作者説も根強い。ここでは作者問題という観点から薛蟠を検証してみる。まず、第1回～第80回までは17回ほどに登場し、特に第34回・第35回の「酔っての放言と醒めての反省」には筆を大きく割いている。第81回以降は7回登場している。割合からすると5：2ほどになり、全体（1～80回：81回～120回）3：2に比べると明らかに前半に偏っている。もっとも、第85回で2件目の殺人事件を犯して拘留されるので本人の登場回数は少なくなって然るべきではあるが、それにしても第81回以降は夏金桂のストーリーが主軸になり、肝心の「恩赦で出獄、母妹と対面」シーンが無いことはやや不満である。思うに、後半で夏金桂という悪役を登場させ、彼女が自業自得という形で服毒死したプロットが元々独立しており、薛蟠入獄の隙間に入れたのではないだろうか。今後の課題としたい。

本稿は平成25年10月5日に日本大学通信教育部で行われた日中文学文化研究学会 紅樓夢研究会において口頭発表したものに加筆修正した。

注

- (1) 马经义『中国红学概论 上册』四川大学出版社 2008年 pp.66-67 によると、421人説・448人説・519人説などがあり、最多は720人説まで各種ある。しかし、近年の統計は詩詞の作者などもカウントしているため、実際の登場人物は400人代になると考えられる。
- (2) 「女は悲しむ—嫁入りさきのご亭主が烏龜どん（忘八ともいい、恥知らずの意味）で、女は愁える—^{ねが}一閨のうちに大猿一^{かめ}びきもぐりこみ、女は喜ぶ—洞房^{あした}に朝迎えて 起きとうもなし、女は楽しむ—一本のい^ちも^つが首をばつっこむ。」
- (3) 马经义前掲書 p.76
- (4) 『紅樓夢人物論』贵州省紅学会編 貴州人民出版社 1988年 所収 顧鳴塘「論紅樓夢中人物与回目之关系」 p.46
- (5) 『紅樓男性』中華書局 2006年 p.145

- (6) 马经义前掲書 p.76
- (7) 前掲『红楼梦人物論』所収 周中明「化丑为美—论薛宝钗形象的塑造」 p.207
- (8) 蒋和森（小川陽一訳）『红楼梦入門』日中出版 1985：昭和60年 pp.73-75
- (9) 吉村英夫『山田洋次と寅さんの世界』大月書店 2012：平成24年 p.66
- (10) 嶋田豊『車寅次郎の世界』シネ・フロント 1995：平成7年 pp.22-25
- (11) 佐藤忠男『みんなの寅さん』朝日新聞社 1988：昭和63年
宮田登「夢と現実のはざまで」『春秋生活学』所収 小学館 1989：平成1年
- (12) 新谷尚紀『寅さんの民俗学』海鳴社 1996：平成8年 p.115 「生前の柳田国男に近かった人として鎌田久子氏に直接伺ってみることにした。すると、鎌田氏はその点について非常によく記憶しておられた。その話によると、いつだったか柳田邸での研究会の席上、土佐の桂井和雄氏が、柳田先生の、「妹の力」について、と発言したところ、いやあれは妹じゃなくて妹なんだよと柳田がいったというのである。」
- (13) 現行『红楼梦』では賈珍の息子賈蓉の嫁である秦可卿は、病死ということになっている（第13回）が、元来の回目は「秦可卿淫喪天香楼」となっており、賈珍と秦可卿の密通を女中に見とがめられて、恥じて首つり自殺したようである。伊藤漱平『红楼梦』上 pp.173-174
- (14) 伊藤漱平訳、池間注。
- (15) 劉姥姥（劉ばあさん）は農家の老婆で、生活困窮のため賈府へ援助を頼みに行き、賈母（賈家の長老）に気に入られた。大観園を案内されたり、豪華な宴席に列なったりして、読者に賈府の様子を伝える役割と同時に、滑稽な言動で小説に花を添えている。最終的には主要登場人物である王熙鳳の娘の窮地を助け、娘を豪農に嫁がせる。
- (16) 『红楼梦』の作者については色々議論があるが、1～80回が曹霑、81～120回が高鶚というのが定説である。参考資料：马经义『中国红学概论（上册）』四川大学出版社 pp.321-336